

CONTENTS

痴漢募集したら人気配信者と繋がった

含まれる要素

カントボーイ

痴漢

モブ責め

クリイキ

乳首責め

玩具責め

挿入

言葉責め

痴漢募集したら人気配信者と繋がった

動画サイトを開くと、蓮見が配信をしていた。サムネイルをタップした瞬間、まぶしい笑顔が飛び込んでくる。

『今日も配信観てくれてありがとう。終わる前にちょっとだけコメント返ししていこうかな』

流れていくコメント欄を、蓮見が目で追う。少しだけ口が開いているけど、そんな顔もかっこいい。

蓮見は巣ごもりブームのときに活動を始めた配信者だ。現時点でチャンネル登録者三十万人。大手事務所に所属しているわけでもないのに、この数字は凄い。

配信は基本、ゲームか雑談。加工もろくにしていないのに鼻につくほどのイケメンだが、喋りが達者でそこそこ口も悪いから、男のファンも多いようだ。

『質問、「彼氏が仕事が忙しいと言って全然会ってくれません。残業続きで疲れてるのは知ってますけど、ひどいと思いませんか。それとも浮気してるんでしょうか」……はは、うーん、なるほど』

少し考えるような顔をしながら、蓮見が首を傾

げた。

『ほんとに好きだったら、無理にでも時間作って会うと思うなあ』

蓮見の言葉に、コメントの流れが速くなる。

『どんだけ疲れててもさ、逃がしたくないって思うくらい好きなら、がんばって時間つくって会おうとするよね。てことは、君がその程度の子ってことなんだよ。浮気を疑う前に、自分を見つめ直すことからはじめたらどうかな』

ハスミンオブラートって言葉知ってる？

正論やめて

まあぶっちゃけそれはそう

顔がいい奴はこれだから……

無限に流れていくコメントは、蓮見の発言に同調するようなものが多かった。

『好きだったら、どんな手を使ってでも会うよ。僕だったら、ね』

妙に実感のこもった言い方だった。

……彼女、いるんだろうか。

まあ、いて当たり前だ。蓮見は顔がいいし、稼いでる。今は配信者専業だが、元々はそれなりの会社に勤めていたエリートだ。きっと、持ってい

ないものの方が少ない男だ。

俺とは、何もかも違う。

同接数千人のうちの、ただの一人。それが俺だ。
顔も頭もフツの学生で、投げ銭もろくにしない、
コメントだって殆ど打たない俺のことなんて、蓮
見は知りもしない。この先も、ずっと。

俺はブラウザを閉じた。そうして指が勝手に、
別のアプリを開く。

履歴の並びを滑って、いつものジャンルへ吸い
寄せられていく。満員電車。はだけた胸。感じ入
る顔。サムネイルを眺めているだけで、喉がひく
りと鳴った。

「……眠れないから、」

誰にともなく言い訳して、そのなかの一つを選
ぶ。

画面の中で、混み合った車両の隅に押し込まれ
た女が、身を強張らせている。やがて背後に立っ
た誰かの手が、服の上から胸をまさぐりはじめる。
声を殺して、必死に前を向いて。周りの乗客は誰
も気づかない。その光景が自分の記憶が重なって、
背筋がぞくりと粟立った。

ちょうど、一年前のことだ。

乗り込んだ満員電車の中で、俺や真後ろにたった男は、明確な意思を持った動きで、俺の尻や胸に触れてきた。

自分の身体を犯す相手の顔なんて見られなかったし、声だって出なかった。喉がぎゅっと締まって、助けてなんて到底言えなかった。ただ息を殺して、快感を引き出そうとする動きに耐えるしかなかった。

『可愛いね』

俺の態度を見て調子に乗ったのか、男は乳首を探り当てて、指の腹で擦ってきた。ろくに触ったことのない場所は、それだけで鋭い刺激を生んだ。

どうか下着の前は触られませんか。そう祈っているうちに、目的の駅に着いた。急いでホームへ降り立ち、階段を駆け下りた。

「……………なんで、」

トイレの個室で下着を下ろすと、そこはぐっしりと濡れていた。

それから俺は、毎晩のように、その日のことを思い出しながら自慰をするようになった。そうしないと眠れないのだ。

『可愛いね』

あの声が、頭にこびりついて離れない。

初めて蓮見の配信を開いたとき、心臓が嫌な音を立てた。痴漢と声が似ていたからだ。蓮見のほうが声はずっと高いけど、少し掠れていて、こちらを見透かすような、どこか含みのある声の響きが似ている。

だから、配信を観ているとどうしてもなく興奮してしまう。

「……っ」

俺はそろそろと片手を伸ばした。パジャマのゴムをずらして、指先で探る。とっくに膨れたクリトリスに触れた瞬間、じん、と痺れが走った。

俺の身体のおかしいところ。こんなものがあるなんて嫌なはずなのに、触るのをやめられない。

「は……っ、う……」

自分の吐息が、静かな部屋にやけに大きく響く。
『声、抑えられない？』

どんな言葉も、あの痴漢の声で再生される。一度よぎってしまうと、もうだめだった。

『変態だね』

なんで。

何度も思ってきた。他人に無理やり触られて、

それなのに感じてしまって——そのうえ、そんな
あられもない姿を、車内の誰かに見られるかもしれ
ない。

どうしようもない状況を妄想して、興奮してい
る。

「っあ、……♡♡」

指の腹で芯を転がすと、腰が勝手に浮いた。も
う片方の手も割れ目に沈ませる。抵抗なんてまる
でなかった。愛液で濡れた指が、くちゅ、と音を
立てる。それがまた羞恥を煽った。

『ああ♡♡やっ、やめて……♡ああ♡』

画面のなかの女が高い声を上げる。

ベッドの上で膝を立てて、腰を浮かせるよう
にして、芯と中のざらざらを擦る。女の声が一段高
くなった瞬間、俺もこらえきれずに達した。

「……ッ、うう、……♡」

腰の奥がびくびくと痙攣して、あふれたものが
手を汚す。俺は枕に顔を押しつけて余韻にひたっ
た。

息が整うまで、しばらく時間がかかった。

力の抜けた手で、ブラックアウトしたスマホを
引き寄せる。とろけきって、涙で濡れて、それで

もどこか物欲しげな表情とぶつかる。途端にいつもの自己嫌悪が押し寄せてくる。

けれど、その感情すらも身体の疼きを押し上げるのだ。目を閉じると、あの日のことが蘇る。可愛いね、と囁く声。逃げ場をふさぐ気配。

俺はたまらずSNSを開き、裏垢にログインした。

『■■■駅■■■時発の■■■線下りの 10 号車に乗るので誰か痴漢して下さい。□□駅で降ります。服装は黒のジーパンに白シャツ、大きめの青いスマホを持ちます。触っていろんなことを確かめてほしいです。#裏垢男子 #痴漢募集 #待ち合わせ痴漢 #痴漢プレイ』

俺のアカウントのメディア欄にはぼやけた性器の写真がある。だからこんな曖昧な書き方をしても、ちんこを触りたいやつは来ない。

閲覧数が瞬く間に増え、次々といいねとブックマークがついていく。

こんなことで承認欲求を満たしている。

……救えない、話だ。

SNSで指定した下り線の車内は、思っていたよりも混雑していた。

ドアと座席の空いたスペースになんとか潜り込んだ俺の背後に、男たちが迫る。

彼らが壁となり、俺は完全に囲われるかたちになった。他人の体温と、電車の揺れ、そして背後に立つ男たちの気配。それだけで、心臓が早鐘を打ち始める。

「……っ」

真後ろに立っているスーツの男が、ズボンの上から、太ももの外側をゆっくりと撫でる。膝から付け根へ、焦らすように往復し、少しずつ内側へと滑り込んでくる。内ももをじっくりと撫で上げ、けれど際どいところで引き返す。焦らすように何度も。一番触ってほしい場所にはまだ触れてくれない。

やがて電車の揺れに合わせて、硬い下半身を尻に押し付けてきた。俺が持っていないもの。

……焦らされている。はやく触ってほしいのに。

太ももの付け根が指先が掠めるたびに、下腹の奥がきゅうっと締め付けられ、下着の中がさらに湿っていくのが自分でもわかった。たまらず硬い

ものに擦り付けるように尻を動かすと、男がくすりと笑ったのがわかった。

「想像してたよりえっちな子でうれしいよ」

耳元で囁かれた吐息が耳殻をくすぐる。

やがて別の手がするすると腹を撫でてきた。子宮の位置を確かめるように触られて、身体が震える。

人の壁のすぐ向こうでは、無関係の乗客たちが電車で揺れている。そんな場所で身体を撫で回されているのだと思うと、かあっと首まで熱くなった。

「おまんこあるの、ほんとかな？」

背後から小さく囁かれる。男が、確かめるように、脚の間を揉んできた。手のひら全体を押し当てて、そこにあるはずのものがいないことを、ゆっくりと確かめていく。

「えっちな身体してるね」

「……っ、ん、」

ズボン越しに、割れ目の形をなぞられる。上から下へ、下から上へ。指の腹が、そこに食い込んでくる。直接触られているわけじゃないのに、いや、直接じゃないからこそ、熱が溜まっていく。

同時に、前に立った男がシャツの上から胸に触れてきた。指先が、探るように動く。やがて乳首を見つけると、その周りを円を描いてなぞられる。避けているみたいに、周りばかりを撫でてくる。

「……っ」

「乳首触ってほしいんだね」

その通りだった。胸を突き出すと、背後の男が小さく笑った。割れ目の上のあたりを指先で押されて、膨れた芯が潰される。

「あ、っ♡」

「可愛いクリちゃん、この辺かな」

ぐ、ぐ、と指で押される。たまらず頭の後ろを男の胸にこすりつけると、前の男が乳首に触れた。かたくなったそこを、爪の先で引っかかれたり、生地ごと摘まんで捻られたり。上と下、弱いところを二箇所同時に撚られて、声が出そうになる。喉の奥がひくつく。ズボンの内側はもうぐしょぐしょで、動くたびに湿った布が擦れて、それがまた刺激になった。

「……っ、う、」

快感だけがどんどん積み上がっていく。俺は目の前の男の腕を掴んだ。全部が一気に来て、頭が

真っ白になった瞬間。

男たちの指が、ぴたりと止まった。

「我慢して」

絶頂の寸前で堰き止められ、行き場をなくした熱が下腹部で暴れ狂う。俺は声にならない声を飲み込んで、膝を震わせた。イきたい。イきたいのに……♡♡

「あ、……っ♡」

「可愛いね」

「——ッ、」

あの時の痴漢に言われた言葉に、顔をのけぞる。

すると視界に入った、斜め前に立つ男が、ちらりとこちらを見た気がした。さあっと血の気が引く。

「……え？」

眼鏡をかけてマスクもしているが、淡い色の瞳と、茶色の髪には見覚えしかない。

——蓮見だ、

思わず声をあげそうになると、蓮見は人さし指を唇にあてた。

痴漢募集したら 人気配信者と繋がった

発行日 : 2026年8月
発行者 : 茉夏乃
X : @manatsuno328
連絡先 : manatsuno328@gmail.com

- この作品はフィクションです。実在の人物・作品・団体・出来事などには関係ありません。
- この本は個人が発行したものです。
- 本書の転載、編集、トレース、転売、使用を禁止します。
- 本作品の著作権は作者に帰属します。
- 購入者ご本人のみお楽しみください。
- AI学習データへの利用を禁止します。

- This is a work of fiction. Any resemblance to actual persons, living or dead, works, organizations, events, or locales is entirely coincidental.
- This work is private individual.
- DO NOT REPOST, EDIT, TRACE, RESELL OR USE MY WORKS.
- All rights reserved. Copyright of this work belongs to the author.
- This work is intended solely for the individual purchaser.
- Use of this work for AI/machine learning training is prohibited.